

## 領域8 インフォーマルミーティング議事録

開催日時：開催日時：2021年3月14日 18:00-19:00

開催場所：オンライン会議(Zoom)

### 出席者

領域代表（任期：2020. 4-2021. 3）

藤 秀樹（神戸大理）

領域副代表（任期：2020. 4-2021. 3）

楠瀬 博明（明大理工）

次期領域副代表（任期：2021. 4-2022. 3）

石田 憲二（京都大理）

次次期領域副代表（任期：2022. 4-2023. 3）

有田 亮太郎（東大工）

領域運営委員（任期：2020. 4-2021. 3）

山中 隆義（東理大理工），平井 大悟郎（東大物性研），町田 理（理研 CEMS），  
光田 暁弘（九大院理），山田 武見（東理大理工）

領域運営委員（任期：2020. 10-2021. 9）

久保 徹郎（岡山理大理），鈴木 雄大（阪大工），鍋島 冬樹（東大院総合文化），  
野本 拓也（東大工）

次期領域運営委員（任期：2021. 4-2022. 3）

日高 宏之（北大院理），谷口 貴紀（東北大金研），柳 有起（東北大金研）  
石角 元志（CROSS）片山 尚幸（名古屋大工）

出席者数：30名程度（上を含む）

### 議題

#### 1. プログラム編集について（平井）

##### 通常の大会との変更点

- 1) オンライン会議なので最終日午後も活用した。
- 2) 部屋の大きさによるセッション配置の制限はなかった。
- 3) ポスター発表は4日間掲載の為、日時調整は不要であった。
- 4) 今大会から、総合講演(3日目午前)とのパラレル講演が可能となった。  
ただし、可能な限りシンポジウムと総合講演がパラレルにならないよう調整が必要

である。

### 反省点・提案

- 1) 編集作業で運営代表と副代表の連携は Slack を利用した。これは非常に有効で今後も活用を勧める。一方、他の運営委員との連絡は回数も多くないのでメールで充分である。領域 3 の運営代表とも Slack で連絡を取ったが、やり取りは多くなくメールで十分だった。
- 2) 前運営代表からの引継ぎに従い、シンポジウムの日程調整でできるだけ早く行ったので、他領域との調整はスムーズだった。一方、私も含め運営代表が対面でのプログラム編集を経験していないので、他のセッションに関してどの領域とどの程度調整が必要なのかが分からなかった。学会が説明会の際に調整のための時間を設けていたが、ほとんど誰も発言せず機能していなかった。

### 【参考資料】

#### 一般講演(申込みベース)

一般講演数	口頭	ポスター	合計
低温	168	52	220
磁性	63	53	116
全体	240	105	345

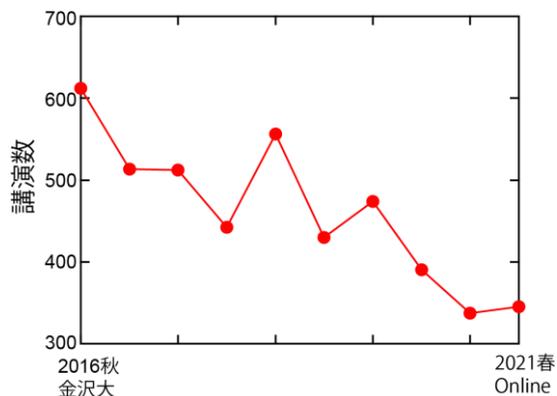
概要提出率： 97. 1% (347/357, シンポジウム含む)

(参考) 2020 年秋季大会

一般講演数	口頭	ポスター	合計
低温	154	43	197
磁性	61	75	136
全体	219	118	337

(参考：過去の講演数合計，新規順)

2020 秋 (Zoom 開催)	337
2020 春 (コロナ中止)	390
2019 秋 (岐阜大)	474
2019 春 (九州大)	430
2018 秋 (同志社大)	556
2018 春 (東京理科大)	442
2017 秋 (岩手大)	512
2017 春 (阪大)	513
2016 秋 (金沢大)	612



「ポスター発表は 4 日間にわたる発表でコアタイムがないので敬遠した人が増えた可

能性がある。」といった意見が上がった。

## 2. 領域委員報告（藤）

### 報告事項

- 1) 担当理事報告（大槻 東巳 委員長，慈道 大介 副委員長）
  - ・次期領域正副代表，今期領域運営委員の報告
  - ・第76回年次大会(2021年3月)のオンライン開催について

### 審議事項

- 1) 第76回年次大会(2021年)招待・企画・チュートリアル講演 シンポジウム講演の採択状況：物性領域・大槻委員長)
  - ・招待講演：6件採択（条件付含む，うち1件は企画講演に変更），0件不採択
  - ・企画講演：15件採択，0件不採択
  - ・チュートリアル：4件採択，0件不採択
  - ・シンポジウム（一般）：9件採択（条件付含む），0件不採択
  - ・シンポジウム（共催）：6件採択，0件不採択
- 2) 米沢賞受賞記念講演の採択について  
推薦領域または受賞者の希望領域を主領域として提案されるが，関連領域代表が領域委員会で申し出れば合同領域として認められることとなった。
- 3) 提案書全体について  
登壇者の業績や論文情報などが不足している提案が多く見られたことから，提案書の「内容説明」箇所に，講演者個々の「業績」もしくは「文献」は記載することとし，記載できない場合は理由を申請書に明示することが求められた。次回以降，提案申し込みWEBフォームにも反映し，より詳細を書いてもらうような工夫をすることとなった。
- 4) 講演の英語対応に関する調査  
賛否両論意見が述べられ以下の内容を再度，各領域で議論し3月末までに報告  
----領域委員会の意見を取り入れた2020年12月12日理事会提案----
  - A) 留学生や外国人研究者の参加者への配慮。
  - B) オンライン会議での海外からの参加者の可能性を広げる。
  - C) 学生への教育などの観点から，
    - ・物理学会としては学会発表スライドの英語化を推奨する。
    - ・将来的には概要集を英語で書くことも推奨する。上記英語化に関する議論の内容は議題7の「その他の告知事項」に詳細を記載する。

- 5) 大会オンラインシステムの改善予定について
- A) 改善予定項目の報告
  - B) 秋学会での各領域からの報告
  - C) セッション運用面での運営委員の負担軽減の検討
  - D) プログラム編集会議のオンライン開催について

6) 今後の大会の開催方針について

定期的にオンライン開催を行う可能性

例えば、年2回の大会のうち、1回を現地開催、1回をオンライン開催。

運営委員がセッション担当につきっきりになるのは運営委員の負担が大きいため何らかの対策が必要である。オンライン開催は、旅費の負担が減るので参加登録費を値上げし、その分でアルバイトを雇うのはどうか等の提案がなされた。

3. 次期領域代表・副代表及び運営委員の紹介とその役割分担（平井）

（公式ウェブにて名前は公開済み）

領域代表：楠瀬 博明（明大理工）（任期：2021. 4-2022. 3）

領域副代表：石田 憲二（京大理）（任期：2021. 4-2022. 3）

運営委員の紹介と役割分担（任期：2021. 4—2022. 3）

代表：片山 尚幸（名古屋大工 磁性・実験）

副代表：日高 宏之（北大院理 低温・実験）

Web・メーリングリスト担当：柳 有起（東北大金研 磁性・理論）

書記：石角 元志（CROSS 磁性・実験）

学生賞：谷口 貴紀（東北大金研 低温・実験）

※実験家の人数が多い理由は領域8全体の人口比を反映するため。

任期：2021年4月～2022年3月

4. 次次期運営委員の推薦・承認（平井、鈴木）

大同 暁人（京大理 低温・理論）

水上 雄太（東大新領域 低温・実験）

関 和弘（理研 CEMS 磁性・理論）

齋藤 開（東大物性研 磁性・実験）

任期：2022年10月～2023年9月

本インフォーマルミーティングで承認された。

## 5. その他の告知事項（藤，他）

学会発表英語化にかかわる検討事項

- ・締め切り：2021年3月26日（金）
- ・宛先：領域8代表・副代表 [jpsf8info@gmail.com](mailto:jpsf8info@gmail.com)

---領域委員会の意見を取り入れた2020年12月12日理事会提案---

- 1) 留学生や外国人研究者の参加者への配慮
- 2) オンライン会議での海外からの参加者の可能性を広げる
- 3) 学生への教育などの観点から，
  - ・物理学会としては学会発表スライドの英語化を推奨する
  - ・将来的には概要集を英語で書くことも推奨する

### 1) 「学会発表スライドの英語化推奨」について領域8としての意見

現時点で既に多数の発表がスライド英語化に対応し、且つ国際化を鑑みても英語化は妥当である。これらの領域8内での議論から、スライド（ポスター）の英語化を**推奨**することには領域8としては賛成とする。

### 2) 「将来的には概要集を英語で書くことも推奨する」についても領域8として「推奨」であれば特に反対はしない（現時点で意見がわかれている状況）。

消極的賛成～反対

- ・ アブストラクトの英語化は、修士課程学生にとってハードルが高い。
- ・ 修士が中心となってる現状で、教員負担が増えるので must には反対するが「推奨」であれば特に反対はしない。
- ・ 国際化と同様に研究者社会に突きつけられている「納税者への公開責任」の観点が考慮されていない。大会の概要集は jstage で公開され、国民からみて比較的アクセスしやすい資料で、一般の人から「物理学」のハードルをあげることになる。
- ・ 修士課程学生で原著論文を書ける学生が少ない中、英語化により学生の理解に支障が生じるのではないか。
- ・ 日本は母国語で自然科学を学べる数少ない国で、ユニークな物理学を展開してきたが、英語化により社会から途絶され、学会そのものが陳腐化するおそれがある。その場合、逆に APS に移るのでは？
- ・ 何が何でも英語にすればいいというわけではない
- ・ 論理的な日本語を書けないのに、論理的な英語を書けるわけがない
- ・ 多少英語に慣れた人でも、英語より日本語で書いた概要のほうが伝わる情報が多い。
- ・ すでに概要集も電子化されているので、学会側で自動翻訳システムを組み込んだ WEB 概要集で対応し、概要集はどちらでもよいとする。

(ただし、自動翻訳による unpublished data の情報漏洩の懸念は指摘された)

#### 賛成

- 最近ではGoogle翻訳も精度が上がってきているので、全ての講演概要集について数年後を目処に英語化した方がよい。
- 英語化は国際標準であるので概要集も英語とした方がよい。

#### 条件付き賛成

- 一般講演は日本語、企画（シンポジウム・招待・企画・チュートリアル）講演についてはスタッフが行うことが多いため英語化してもよい。
- シンポジウム、一般講演は学生の理解を助けるためにも日本語にすべき。
- 読んで欲しい言語を選択できると良い。

上記した意見を鑑み、領域 8 としての意見は「現時点で、これを既定路線することにはさらなる議論が必要である。」ということとした。

- 3) 上記理事会提案事項「2) オンライン会議での海外からの参加者の可能性を広げる」については、現状で今後すべての会議がオンライン開催になると決定していない段階で議論されるものではなく、全会議がオンライン化されて初めて議論されるものという意見があった。

以上  
(文責 町田)